

特集

老視矯正眼内レンズアップデート

序 論

根岸一乃*

白内障手術，特に現在の標準術式である水晶体超音波乳化吸引術およびフォルダブル眼内レンズ挿入術は，眼科領域の手術のなかで最も成熟した術式である。現在も手術の安全性や精度の向上の追求が続いている一方で，視覚の質の観点からは，術後の調節力欠如への対応，すなわち老視対策が重要な論点になっている。

白内障術後の老視対策のなかでも老視矯正眼内レンズは最も確立した方法のひとつである。老視矯正眼内レンズは大きく調節眼内レンズと多焦点・焦点深度延長眼内レンズの2つに分けられ，老視矯正眼内レンズのなかで最も成功しているのは，多焦点および焦点深度延長眼内レンズである。これらは，単焦点レンズと比較して眼鏡への依存度を低減する一方で，トレードオフとしての視覚の質の低下（コントラスト感度低下や不快光視現象など）が問題であった。しかし，近年は各社から光学的問題が改良された新しい老視矯正眼内レンズが次々と開発，上市され，術後視機能は以前よりも向上し，選択肢も増加している。眼内レンズの光学機構は，過去10年は回折型が主流であったが，近年はそれ以外の機構をもつ眼内レンズが増加している。

日本眼科医療機器協会の調査によると，国内において過去数年間，多焦点眼内レンズの割合は眼内レンズ市場の5～6%を推移している (<https://>

www.joia.or.jp/annual_report/annual-report-2024/p6/) が，眼内レンズの性能が向上し，選択肢が増加したことから今後増加する可能性もある。

このような状況のもと，患者のニーズに合わせて眼内レンズを選択するため，そして術後満足度向上のためには，手術前の十分な説明が非常に重要であり，各眼内レンズの特徴や臨床成績など，知識のアップデートが必須であることは論をまたない。

本特集では，老視矯正眼内レンズについて，適応，それぞれのレンズタイプの特性，成績，および不満患者への対処について解説していただいた。最新の老視矯正眼内レンズの選択基準，手術の流れ，そして患者が抱える可能性のある問題点について，ご理解いただけることと思う。適応については金沢医科大学の初坂奈津子先生と鶴飼祐輝先生，高次非球面単焦点眼内レンズについては和歌山県立医科大学の岩西宏樹先生，焦点深度延長眼内レンズについては筑波大学の長谷川優実先生，3焦点眼内レンズについては東京歯科大学水道橋病院の太田友香先生，不満例への対処については北里大学の神谷和孝先生にご担当いただき，基本的事項から最新の情報までわかりやすく解説をいただいている。本特集が診療の一助となれば幸いである。

*Kazuno Negishi 慶應義塾大学医学部眼科学教室